

十一月十二日

十一時北海道十勝後藤健市氏来室。ヘレンケラー記念塔セミナー棟の打合せ。TV番組の影響なのだろうか、リフォームの問い合わせや相談等があったりで仲々大変だ。石山研の仕事がピフオアー・アフターの感じで受け止められているのだろう。悪い事ではないが、全部には附合いきれぬ。昼食李祖原と印度カリー。十四時山本伊吾、長井美暁来室、李祖原インタビュ。楊さん通訳。最初だけ同席したが、全く問題無さそうなので、すぐ離れた。十七時マティアス・ザウアーブルツフ教授来室。シュトゥット・ガルト芸術アカデミー。講義。十九時半修了。ドイツの中堅世代を代表する建築家。環境・テクノロジを軸に自作を語った。パウハウスの運動を自作の源としている。ドイツ型テクノロジカル建築なのだがその建築の特徴は特に平面計画を律している様々なカーブの組合わせにある。そのカーブは何処かでメンデルゾーンの建築を思わせるものがある。もう一つの特徴は色彩である。レクチャーの後、色彩の使い方はハンス・シャロンにルーツがあるのではないかと問うたら、いやむしろ、カンデンスキーに影響されていると答えが返ってきた。仲々、理知的な男だというのが解った。日本でいうと、伊東豊雄をもう少しロジカルにした感じかな。パウハウスの歴史を背負っている厚みがあるしな。世代で言えば隈やシーラカンスの世代だが、彼等よりはズーツと骨太だな。日本の建築家は皆小器用なところが目立つ。彼はJ・グラ

イターの紹介で早稲田にやってきたのだが、グライターの眼は確かであった。良い建築家と知り合いになった。明日ディナーと一緒にしようかと約束して別れた。世界は広い。日本でチマチマやつてると本当に見えなくなるものがある。置いていったクロツキー誌の彼の特集と、本を明日は目を通しておこう。二十二時半世田谷村。帰りの電車で南仲坊のエッセイ読む。何故、仲坊を読むのか我ながら筋が通っていない。しかし仲坊の文体を読みたい時があるのだ。